第3部 大学事例報告（Ⅰ）

九州国際大学 法学部

「ジェネリック・スキルと成績評価」

九州国際大学
法学部長
山本 啓一

本学の1学年の定員は600名で、法学部が180名です。現在の入試難易度は残念ながら下位に位置しています。就職率はそれほど悪くないのですが、本学の卒業生の評判を企業に聞きますと「いいんだけれど、学力が足りない」「もうちょっと勉強させてやってください」などとずっと言われています。そこで、何をどういうふうに学ばせればいいのかと考えているわけですが、その一環としてPROGのリテラシーテストとコンピテンシーテストの試行版を、2010年度と2011年度、1･2年生を中心に受けさせました。その結果をまとめたことをもとにお話しします。

1. 本学における PROGテスト受検の意義

問題の所在

PROGのリテラシーテストは「地頭（じあたま）のよさ」をある程度測定できているのではないかと思いました。地頭というのは企業の採用担当者がよく使う言葉です。ですから、その地頭、つまりリテラシーの育成に、大学として学部として組織的に取り組んでいくことが必要だと思っています。

実際にリテラシーテストを受けて、学内の成績データとの関連性を検討しました。分かったことは2つです。第1点は、大学は学生のリテラシーを正しく評価できていないということ。第2点は、リテラシースコアは入学時の学力と大きく関連しているということです。それは2年次についてもあまり変化が見られませんでした。つまり、残念ながら本学では大学教育を通じてリテラシーの育成ができていないということを、この結果は表わしていると言えます。

当然、この現状を克服していくことが課題となります。私たちはPROGの中でも特にリテラシーテストを重視していますが、今後、そのための教育改革を進めていく中で外部指標として活用していきたいと思っています。

ジェネリック・スキル（リテラシー）について

先ほどリテラシーテストは地頭のよさを評価していると言いましたが、それはリテラシーテストの設問が、情報をどれだけ知っているかではなく、手持ちの情報を組み合わせて推論するように設計されているからだと思います。つまり、いかに知識を活用しているかを評価しているわけです。

これまでは「地頭のよさは教育ではなく本人の資質だ」、「地頭はアルバイトやサークルのような体験や人間関係で鍛えられる」、「汎用的能力は大学教育ではできない」と言われてきました。しかし現在のユニバーサル化が進んだ大学では、リテラシーを持った学生を前提とした教育から、大学教育を通じてリテラシーを育成する時代へと転換しています。つまり地頭＝リテラシーを大学教育を通じて育成しなければなりませんし、それは可能なことだと考えています。

中教審の学士力の答申の中で「獲得した知識･技能･態度等の総合的な活用」という言葉が入っていますが、リテラシーの育成は学士力の質保証の要件の一つだといえます。

実際に本学の法学部のディプロマポリシーを見ると、「法律を使って考える」「問題を解決する」「大学で学んだ知識を活用する」という言葉が入っています。専門教育を通じてリテラシーを育成するということですから、リテラシー育成は、明確に意識しているかどうは別として、本学部でも重要な教育目標になっているのです。

本学の法学部は警察官を多数輩出しています。これは民間の大企業も同じかと思いますが、警察官の仕事の幅は非常に広く、一つの組織の中でさまざまな経験をします。そのためには、基礎学力と学習能力が不可欠です。そういう能力を発揮して常に向上していかないと出世もできない。ですからジェネリック・スキルは大学時代に伸ばさなければなりません。

2. 分析と考察

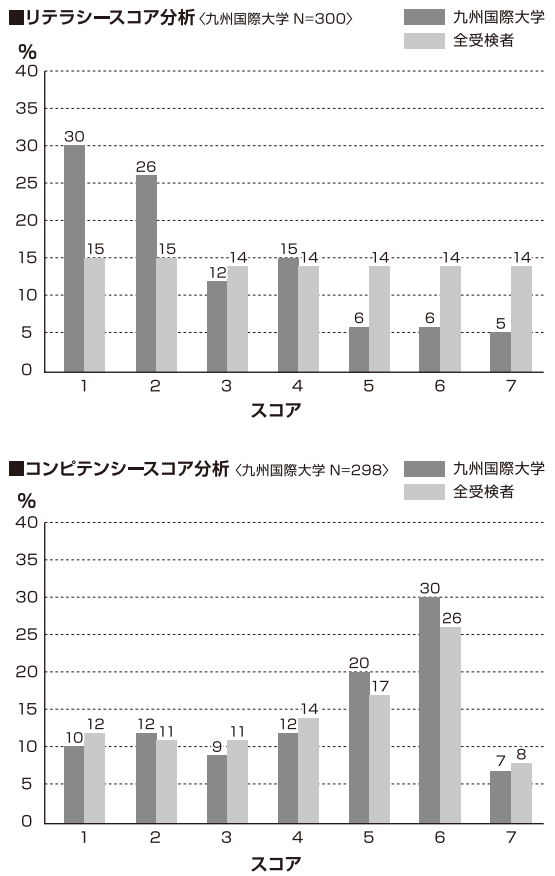
PROGテストと「成績」の関係

PROGテスト結果と学内の成績がどう関連しているのかですが、次の2点が言えます。

まず第1点めに、GPAとの関連性は上位の学生ほど薄いということです。今回の受検は1･2年生ですが、**図表1**のように本学はリテラシーテストの結果が低く、スコアの1･2が圧倒的に多い。逆にコンピテンシーテストの結果は全国平均と比較して遜色がない、という結果がでています。

次にリテラシースコアと学内のGPAにどんな関係があるかを見ます（**図表2**）。GPAを1.0未満、1.0以上2.0未満、2.0以上3.0未満、3.0以上の4段階に分けました。これをリテラシースコアの1から7と合わせてみました。たとえばリテラシースコア7を取った学生はGPAでどのくらいかを見ると、確かに7を取った学生はGPA2.0以上の学生だけなのですが、逆にGPAが3.0以上ありながらリテラシースコアが1の学生がかなりいます。そして1〜7に均等に分布しています。つまり学内で成績が良い学生でもリテラシースコアが低い学生がたくさんいるということです。

図表1 リテラシー・コンピテンシースコア分布



リテラシーが地頭だとして、これが就業力と関連しているならば、学内の成績がよいことが、そのまま企業が評価する人材＝就業力の高い人材になっていない、つまりGPA＝学内の成績評価は企業の人材評価とずれているということになります。

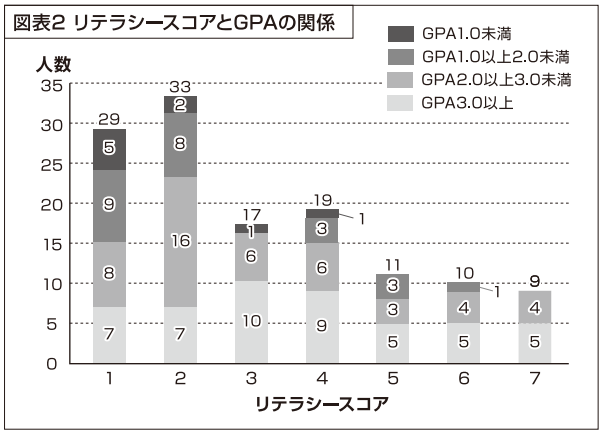
その理由としては、本学の成績が、学生のリテラシーを反映したものになっていないことが考えられます。これは「知識の活用」という側面を授業で十分扱っていないのではないか、あるいは「平常点」などの学生の努力姿勢が評価に組み込まれてしまい、学生の生の評価（期末試験の素点など）が曖昧にされていることも考えられます。

第2点めに、「成績のよい学生の方が就職に苦労することがある」と言う教員もいますが、教員の多くが、学生のジェネリック・スキルをきちんと理解していないのではないか。これは非常に重要な問題で、そうだとすると大学の授業によって社会で評価される能力を育成できないのではないか、ということになってきます。そうではなく、基礎学力がない学生が入学している以上、学生の基礎学力を124単位のなかで鍛えていかなければならない。学生を勉強に向かわせなければいけないとするならば、「勉強すれば就職できる」「勉強すればジェネリック・スキルが上昇する」ようにしていかなければなりません。

授業者の実感としてリテラシーテストの結果は納得できます。リテラシーが高い学生はやはり「地頭のよい」学生が多い。授業やゼミの中で、予期しない質問を出した時にすぐに答えられる学生、応用問題で成績が良い学生などはリテラシーテストのポイントも高いのです。

また、2011年度に警察官に合格した女性がいます。女性が警察官になるのは男性より難しいのですが、その学生のコンピテンシースコアは高くないし体力もなさそうだったので合格は難しいと思っていました。ところが、その学生は見事に合格して、みな驚きました。そこで2010年度のリテラシースコアを見ると7だったのです。このテストに全面的に依存するわけではありませんが、納得できるところがかなりありました。

図表2 リテラシースコアとGPAの関係



リテラシーテストと プレイスメントテストの関係

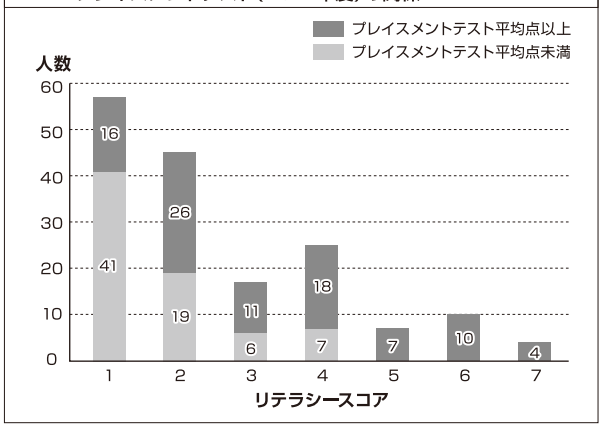
では何がリテラシースコアに影響を与えているのか。それは高校までの学力です。

図表3は2011年度の1年生が受けたリテラシーテストと入学した時の英語・国語のプレイスメントテストの比較です。プレイスメントテストで平均点以上を取っている学生はリテラシースコアが高い。逆にいうと、リテラシースコアが高い学生はプレイスメントテストの平均も高いのです。

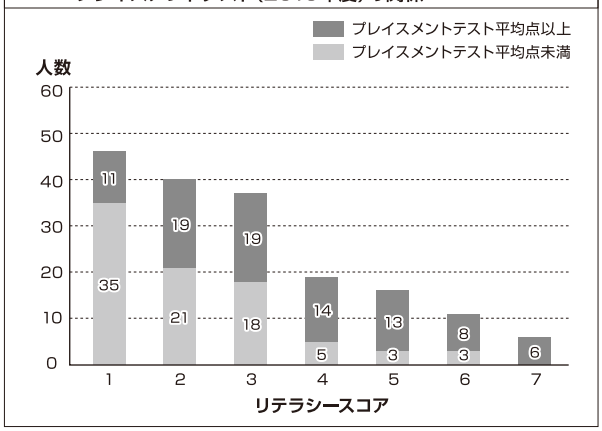
図表4でも、2年生が2010年度に受けたリテラシーテストとプレイスメントテストの結果を比較していますが、プレイスメントテストの平均点が高い学生の方がリテラシースコアでも高い割合が多い。

さらに**図表5**は、2年生で2011年度に受けたリテラシーテストと2010年度のプレイスメントテストとの比較です。プレイスメントテスト結果が低い学生も多少リテラシースコア5、6、7に入ってきていますが、全体としてやはりプレイスメントテスト結果が高い学生の方がリテラシースコアが高いと言えます。これは大学の教育力が高校での成果を塗り替えていない、つまり大学の教育力が十分でないと見るべきでしょう。

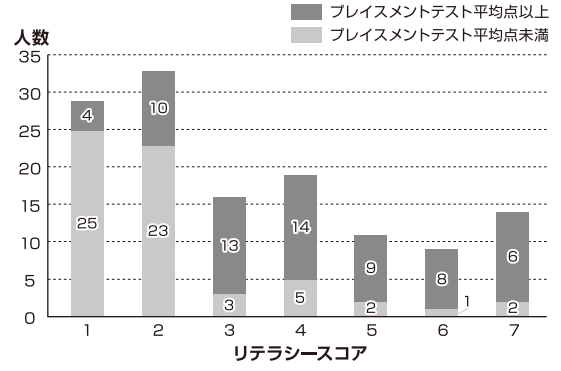
図表3 リテラシーテスト(2011年度)と プレイスメントテスト(2011年度)の関係



図表4 リテラシーテスト(2010年度)と プレイスメントテスト(2010年度)の関係



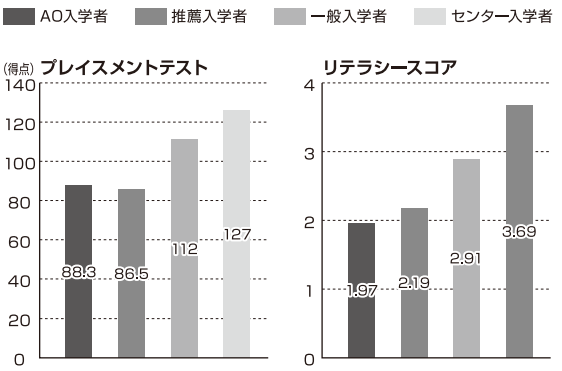
図表5 2010年度プレイスメントテスト受験者の 2011年度リテラシースコアとの関係



入試形態とリテラシーテストの関係

次に入試形態で見ます。**図表6**のグラフは左からAO、推薦、一般、センターの順ですが、プレイスメントテストの結果を見るとセンター入学者は、AO・推薦入学者と比べて平均点が30点くらい高い。リテラシーテストも同じです。AO入学者はリテラシースコアの平均が2に満たないのですが、センター入学者は平均が3.6以上あります。

図表6 入試形態別 プレイスメントテストおよびリテラシースコア比較



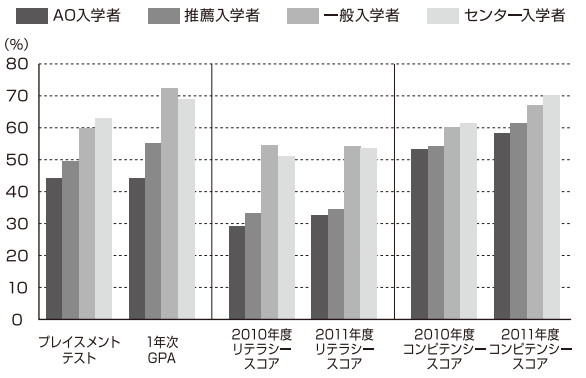
図表7の2年生のスコア経年比較を見ると、入試形態(AO・推薦・一般・センター)によってプレイスメントテストに差があり、1年次のGPAも同じように差が出ています。2010年度に受検したリテラシーテストの結果も同様ですし、2011年度(2年次)も差が出ています。ただ、1年次と2年次の結果をみるとAO入学者だけが少しスコアが伸びています。

またコンピテンシーテストの結果についても、同様の傾向が見られます。つまりセンター試験入学者の方がコンピテンシーテストの結果も高くなっているのです。

コンピテンシーテスト結果で2010年度(1年次)と2011年度(2年次)を比較すると、結構伸びています。これがすべて教育の成果だとは言えないわけで、アルバイトや課外活動などのさまざまな体験がミックスされることで、

コンピテンシーが伸びているのではないかと思います。他方で、リテラシーが1年次から2年次の過程で伸びていないというのが本学の問題点です。

図表7 入試形態別にみた2年生のスコア経年比較



（グラフは、データを相対化して、見やすくしたもの）

ジェネリック・スキル（リテラシー）向上の取り組み

本学の課題の一つはリテラシーを伸ばすことです。そのために2011年度からリテラシーの育成を意識して文章作成の授業を1年生ほぼ全員に入れました。具体的には、4人の先生が担当し、少人数クラスを共通シラバスにして、試験的に実施することもあり、教養特殊講義という科目を使いました。この授業では、単に文章が書けるという形式上のことではなく、リテラシーを伸ばしていくことを教育目標に入れました。

この授業を通じて私たちは、学生のリテラシーの弱さをはっきりと認識しましたし、その育成方法についてもいろいろと考えてきました。たとえば、**図表8**の課題A、課題Bがありますがどちらが難しいと思われますか。

図表8 AとBのどちらがリテラシーを問うているか

課題A

「ホップスとルソーについて与えられた資料を読み、2人の思想家の対比的な考え方を踏まえた上で、なぜ人間社会において法律は必要なのかという点について、あなたの意見を400字以内で述べよ。」

課題B

次の3つの日本経済に関する表から読み取れることは何か。40字以内でまとめなさい。

一人当たりのGDPの世界ランキング推移

2000年	2008年
3位	23位

世界のGDPに占めるシェアの推移

1990年	2006年
14.3%	8.9%

IMD国際競争力順位の変遷

1990年	2008年
1位	22位

どちらが難しいかというと、学生の課題達成率は圧倒的にBが低い。課題Aは、ホップスはこう言っています、ルソーはこう言っています、その2つを並べたうえで、なぜ法律が必要かということが書ければいいので、8割くらいの学生ができます。与えられた資料をつぎはぎしたら書けてしまいます。

ところが課題Bは、GDPなどの用語を説明した上でも、学生の2割も答えられません。「この20年間で日本の相対的な国際競争力が低下している」と言えないのです。リテラシーが弱いとはこういうことであり、我々は学生がこういう課題に答えられるようなトレーニングをしていかなければならない、と気付かされました。

3. まとめ

今後の課題

今後は、一つ一つの授業において、教員がリテラシー面と専門知識面との両側から学生の達成度を評価するテストを作れるようになることが必要だと思います。そしてテストを作るということは、それが答えられるように教えなければならないわけで、授業内容も専門知識を教えると同時にリテラシーも育成する、知識を活用する面も鍛えていく内容に変えるための工夫が求められると思います。

我々がまずやるべきことはPROGテストを外部テストとして使いつつ、学生のリテラシーを問う問題は各科目においてどのようなものがあるかを既存の試験から洗い出すといった作業でしょう。その上でリテラシーの概念を明確にし、マップ化することです。そして、学生が「どういう問いに答えられるようになればよいか」という発想から、カリキュラム設計と授業の設計を行っていかなければならないでしょう。それが今後の我々の課題になる、というのが現状です。

（2011年9月3日 福岡市電気ビル）